

中へ河川をさへりて我光云ふに又急ぎに筑後を駕れ
ぬに汝等中条を極せり松子より見て帰るに何者ぞ
も苦しかしとて筑後君よりれども中にてよきかき
者をはなれとれどもに中条の神女一々終て死歸
る中より中条大名又之を佐官の公家方此中安達
三平人外之の市公達以生害の次目録にて姫君
ハ中条に當り給ひり三平河原に二十四回に居
たり庶垣結垣一其中に車に付て九尺四方にす
塚をりて関白秀次公の古首を西宮にまじりて中条
に女房達を三十六人發國の者を具足きく太刀長刀

拔持きもろきましくかきり彼上臈達のけつちうつ
に勝れそ花やまに誠に移り形る世の中やまのふたふた
引かてさもあけあるや海かみのなまけもさぬ川原
者君の手に海よりふ神もも中かきをわはれて車
一輛に五人の引手も若君姫君三人は中乳女の手を
引もあし其毎現の膝に中洛中を引せり三平河原
へ引付車より引あり庶垣の内にあく諸人よさく
く面をひきともや中条期近くありしうも上臈
達をく短句思ひく此辭世をあらわし給まり

一番に菊庭の大納言殿は娘の年二十四歳是第一の